

氏 名 林 禊映

本論文は日本語の評価副詞の中から「いっそ」「さすが」など8語を取り上げて、これらがどのように他の意味を持つ語から形成されたか、その過程を考察したものである。全体は10章から構成されている。

序章では従来の評価副詞に関する研究が、種々の点において極めて不十分であったことを指摘し、これらの語の意味、用法についての通時的研究が必要であることを主張する。

第1章「いっそ」では、漢語「一双」に由来するこの語が、中世後期には「まとめて」の意の副詞となり、近世前期の上方語からは現代語と共通する意味が発生したと述べる。

第2章「さすが(に)」では、平安時代には「そうは言うもののやはり」の意味で用いられていたものが、中世前期からは「それも順当だ」の用法が加わり、さらに中世後期からは「それも順当だ」と認めた上で高く評価する用法が加わって現在に至ることを述べる。

第3章「しょせん」では、漢語「所詮」に由来するこの語に、中世前期には「結局」の意味を表す用法が発生し、さらにそれが中世後期には否定的意味に転じたことを述べる。

第4章「せいぜい」では、漢語「精誠」に由来するこの語が、「心や力を尽して」の意の副詞になるのは近世後期で、想定の上限を示す用法は近代に入ってから成立したと述べる。

第5章「せっかく」では、漢語「折角」を起源とするこの語が中世後期から「力を尽くして」の意の副詞として使われ、近世から肯定的な評価を含むようになったことを述べる。

第6章「せめて」では、平安時代に「努めて」あるいは「切実に」の意味であったこの副詞が、中世前期に話し手(書き手)の最小限の願望の用法に転じたことを述べる。

第7章「どうせ」では、この語が「どうせよ(どうせい)」に由来し、近世前期から「いずれにしても」の意で使われ、近世後期からは否定的意味に転じたことを述べる。

第8章「なまじ(っか)」では、奈良時代には「なまじひに」の形で、「無理に」の意味であったものが、中世前期には「中途半端に」のような否定的な意味が生じたと述べる。

終章「結論」では、前章までの内容をまとめた上で、評価副詞の形成過程に見られる意味や構文の変化の特徴を論じている。

本論文は、評価副詞の研究が従来極めて手薄であり、その形成過程が十分解明されていないことを批判した上で、8語の評価副詞を取り上げて、奈良時代から現代に至る膨大な日本語資料に基づいてこれらの語の形成と意味変化の実態を丹念に検討している。その形成と意味変化の要因や契機分析にはなお課題を残す面はあるものの、総じて本論文は評価副詞についての研究を大きく進めたものとして高く評価できるものであり、本審査委員会は、全員一致で本論文が博士(文学)の学位を授与するに値するとの結論に達した。